

日本の名文19

参考①ウイキペディア②青空文庫

はるばるの
春は馬車に乗って 横光利一

「あたしの骨はどこへ行くんでしよう。あたし、それが気になるの」——彼女
の心は、今、自分の骨を気にしている。——彼は答えることが出来なかった。——
もう駄目だ。

彼は頭を垂れるように心を垂れた。すると、妻の眼から涙が一層激しく流
れて来た。

…中略…

彼と妻とは、もう萎れた一對の茎のように、日日黙って並んでいた。しかし、
今は、二人は完全に死の準備をしてしまった。もう何事が起ろうとも恐がるものは
なくなつた。そうして、彼の暗く落ちついた家の中では、山から運ばれて来る水
甕の水が、いつも静まった心のうちに清らかに満ちていた。

彼の妻の眠っている朝は、朝毎に、彼は海面から頭を擡げる新しい陸地の上
を素足で歩いた。前夜満潮に打ち上げられた海草は冷たく彼の足にからまりつ
いた。時には、風に吹かれたようにさ迷い出て来た海辺の童児が、生々しい緑の
海苔に迂りながら岩角をよじ登っていた。

海面にはだんだん白帆が増していった。海際の白い道が日増しに賑やかになつ
て来た。或る日、彼の所へ、知人から思わぬスイトピーの花束が岬を廻って届
けられた。

長らく寒風にさびれ続けた家の中に、初めて早春が匂やかに訪れて来たので
ある。

彼は花粉にまみれた手で花束を捧げるように持ちながら、妻の部屋へ這入って
いった。

「どうとう、春がやって来た」

「まア、綺麗だわね」と妻は云うと、頬笑みながら痩せ衰えた手を花の方へ差
し出した。

「これは実に綺麗じゃないか」

「どこから来たの」

「この花は馬車に乗って、海の岸を真っ先きに春を撒き撒きやって来たのさ」
妻は彼から花束を受けると両手で胸いっぱい抱きしめた。そうして、彼女は
その明るい花束の中へ蒼ざめた顔を埋めると、恍惚として眼を閉じた。

横光利一（よこみ
つりいち 一八九八
—一九四七）

日本の小説家・評
論家。戦前、「小説
の神様」とも称さ
れ、一世を風靡し
た。また、新感覚
派として、言語表
現に新しい感性表
現を持ち込み、代
表作の一つ「機械」
では、意識の流れ
を表現し、欧米の
表現理論に呼応し
た。

この「春は馬車
に乗って」は、中
期の代表作で、い
わゆる亡妻もの、
あるいは結核文学
などと称される主
題を取り扱ってい
る。

主人公の小説家
の妻は、結核を患
い、余命いくばく
もない。妻の切な
いまでのわがまま
な要求に対し、主
人公は苦しむ。そ
の内的葛藤を、内
面に踏む込むこと
なく、いわば写真
が風景を写しとる
ように描くこと
で、言葉に尽くせ
ない「哀しみ」を
表現する。

また、少年の行
動を描いたような
「彼の妻の眠って
いる朝は、朝毎に、
彼は海面から頭を
擡げる新しい陸地
の上を素足で歩い
た」という何気な
い文にも、比喻と
写実とが重なり合
って、美しい清々
しさを感ぜさせ
る。

今なお、新鮮さ
を失わない作品で
ある。